

<コラム>

エイムズ唯子の

「心理学の周辺」

* * * * *

第5回：「ピキピキピッキー！」の巻

頭のなかに天秤ばかりを置いて、片方のお皿に「わかっていること」、もう片方のお皿には「わからない」ことを載せたら…？私の場合、わからないことが載っているお皿が重すぎて、秤はびくともしません。考えてみると私の職場である「教室」は、実に非日常的な空間です。難しいことはわかりやすく説明され、質問には答え



質問：お皿のなかみは
なんでしょ？

が用意されています。

この嘘っぽさから、学生も私もいづらか自由になれるのが、ゼミという時間です。私のゼミではこの数年、「愛と犠牲」をテーマに、映画を見ています。我ながら立派なテーマを選んでしまったものですが、しんどいながらも看板を出し続けているのは、「愛」とはなにか、「犠牲」とはなにか、私自身がわからなくて、わかりたいからです。ついでに私、映画につ

いても、笑ってしまうくらいの素人なのです。ハハハ！

このゼミでの先日のやりとり。「メゾン・ド・ヒミコ」（2005年、犬童一心監督）を見終わった時のことです。これは、ゲイのための老人ホームを舞台に、柴咲コウさん演じる「沙織」と、彼女の父でゲイの「卑弥呼」（田中泯）、卑弥呼の愛人「岸本」（オダギリジョー）の3人を中心に描かれる物語。決してとっつきやすい物語とはいええないのは承知の上でしたが、それでも、「どうだった？」とまずは感想を聞こうと投げかけた問いに、「わからなかった」とある学生が答えたときには、少々たじろぎました。しかも、「そうね、どんなところがわからなかった？」と聞いたところ、答えは「ゼンプ」。類は友を呼ぶ、と申しませんが、ダイタンフテキな教員と学生も互いにひきつけ合うに違いありません。

「あたし、バレリーナになりたかったの♪」が口ぐせの「ルビー」は、卑弥呼がはじめた老人ホーム「メゾン・ド・ヒミコ」の一利用者でしたが、脳卒中で倒れ、「彼」が心も体も女であることを知らない家族に引き取られます。ルビーの部屋から出てきたのは、宛名のない葉書の分厚い束。そのすべてに、「ピキピキピッキー！」というアニメキャラの魔法の呪文が子どもの筆跡でカラフルに描かれています。ルビーには会ったことのない孫娘がいて、葉書はその少女から届いていると、元気だったときのルビーはうれしそうに語っていたのですが…映画は真相を明かしません。

わかる、ということとは、ある事象の「確からしさ」を、自分の経験や知識の引き出しの中身に照らして説明できること、でしょうか。そうだとしたら、わからない、ということは経験や知識や理解力の不足に原因がありそうです。ところが、映画の世界ではしばしば、わかりたがる観客の思惑が小気味よくかわされ、わからないことがゆるされます。

私にできることは、いろんな「わからなさ」を学生といっしょに楽しみながら、ゼミでの経験が同じ「わからない」、なら、どうでもいい感じのわからないではなく、「わかりたい感じのわからない」であるようにほんのちょっと舵取りすることかなと、最近思うようになりました。さてと、ゼンプわかんないんじや、どこからはじめようかなあ…。

（高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者）

答え：庭でとれたラズベリーとグミ